

◎野木京子 8月

あの人の骨が
カタカタ鳴ったから
月までひとり
歩いて帰る

まちりこ（埼玉県）

*骨壺のなかで骨が揺れたのか。その途端、宇宙空間をぼつんと彷徨う心情になった。乾いた表現で表された孤独。

産んじゃえば
わたしとは別の人間で
ぺちゃんこのお腹で
君をながめた

加藤 美紀（愛知県）

*人間が人間を産むのは不思議だと思ってしまう。少し前まで一心同体だったのに、いまは自分とは違う人間になり、違う感情と思考を持つ存在になっている。不思議さと一抹の寂しさ。

空っぽの湯船に座る 空っぽの
夜が私を遠巻きに見る

まちりこ（埼玉県）

*今月もまちりこさんの詩を複数佳作に選んだ。生きていく寂しさを見事に描いている。この世界にぼつんと点のように存在している私。

どん底の底には

濃いものが残ってると思うね

秘密の味やから

清阪佑（大阪府）

*「どん底」はときどき使う言葉だけれど、どこまで落ちたら「どん底」なのかはほんとうはよくわからない。きっとえぐい味がするのだろう。

落ちた星拾うみたいに生きている

細村 星一郎（東京都）

*生きていると、きらりと光るものを見つけることがある。「落ちた星」とはそういうものを指しているのだろう。そして、そういう光を見つけて拾いあげないと、人は生きていけない。細村さんの詩はいつもながら、一行できらりと光っている。

「おはよう」が

冬の間は目に見える

猫谷圭希（広島県）

*なんとも斬新な感覚。そう言われてみればそうだな。冷たい大気のなかに吐かれた白い息が見えるようで、映像的でもある。

数学の時間の

頭の中は

駄々っ子になる

テコでも動かない

桜咲（千葉県）

*数学は、ちょっとしたきっかけでわかるときもあるけれど、わからないときは、手も足も出ないだるまさん状態になる。頑として言うことをきかない駄々っ子に喩えているのが面白い。

赤子のおなかに耳を当てると
潮騒がかすかに聞こえる

広田 土（大阪府）

*羊水と海水はほとんど同じ成分らしい。赤ちゃんの体には、海水のなかで暮らした日々の記憶が残っている。読んで穏やかな気持ちになる詩。

母のお腹の
姉と私を取り出した痕
縫い閉じられた
無限の空間

春町 美月（大阪府）

*帝王切開の傷の向こう側は子宮で、子宮には未生の時間が詰まっている。おまえはどこから来たのかという問いには、「無限」から来たと答えるしかない。

晴れた日の瀬戸内海はよく笑う

猫谷圭希（広島県）

*猫谷さんはこの詩も映像的で鮮やか。きらきらした無数の光が見えるようだ。